

# 中世香取社の祭りと境内景観の意味

## －香取神宮神幸祭絵巻と境内古絵図から考える－

國學院大學  
笹生 衛

### 1.はじめに

- ・東国で特別な歴史と格式を持つ著名な古社、鹿島神宮と香取神宮。
- ・古代、神のための郡「神郡」として鹿島郡と香取郡が設置され、国家の祭祀対象となった重要な神社。
- ・このうち、香取神宮については、かつての祭礼と境内の実態を現在に伝える2種類の絵画資料が残る。
- ・一つは、神輿が渡御する神幸祭を描いた「香取神宮神幸祭絵巻」。
- ・もう一つは、17世紀以前の境内景観を描写した「香取神宮境内古絵図」と「当社惣絵図」。
- ・それらの内容は、近年の研究により平安時代末期の12世紀から鎌倉時代の13世紀まで遡る可能性が高いと考えられる。
- ・この二つの絵画資料をもとに、中世の香取神宮（香取社）の代表的な祭りである神輿が渡御する「神幸祭」、また香取神宮の境内景観の歴史と意味について考えたい。

### 2. 神輿渡御の祭礼・神幸祭の成立と性格

#### 神輿渡御の祭礼の成立

→平安時代の10世紀、自然災害と感染症の蔓延が連鎖する危険な環境のなかで、平安京の都市民が自らの意志で霊験のある神を自らの生活・生産活動の場移動させ信仰・拝礼する新たな祭礼の形が成立。

- ・不特定多数の人々が観覧・参加できるのが「祭礼」。
- ・平安京の都市域（左京）の拡大と経済的な発展をうけて発達。都市民の災害に対する精神的なレジリエンス機能を担う祭礼として定着。
- ・12世紀後半『年中行事絵巻』の神輿渡御→祇園社の祇園御霊会（祇園祭）と伏見稻荷大社の稻荷祭。

神輿渡御行列の基本構成＝①捧げ物のグループ「御幣（幣帛）・供献品」→②神輿を先導する歌舞のグループ「王の舞・獅子・田楽・神楽など」

→③渡御行列の中核グループ「御幣（幣帛）・神輿」→④供奉する神官グループ「衣冠・束帯で騎馬の神官、田楽など」。

→捧げ物・歌舞を含む神輿の渡御行列の構成は、天慶8年（945）の神輿の最初の具体的な記事（『本

朝世紀』)にある形を踏襲。

※都の神輿渡御の形態が地方でも導入された。

### 神輿渡御祭礼の地方での受容

- ・地方の一宮で、神輿渡御の祭礼を初期に導入した例に下総国一宮、香取神宮の神幸祭。
- ・その様子を描写したのが「香取神宮神幸祭絵巻」。7種類の諸本が存在。2系統に分類。
- ・①「使う絵巻」＝細かな注記を加え、絵画表現は素朴。神官の誰が如何なる装束で行列に加わるかを示す。
  - 「権檢非違使家本」(紙本)、「香取神宮本〈旧多田家本〉」(紙本)、「日本民芸館本」(紙本)、「彰考館本」(紙本)。
  - ＝巻末の奥書から至徳3年(1386)の状況を反映。
- ・②「観る絵巻」＝注記は全くなく、丁寧・正確な絵画描写。観賞用の絵巻。
  - 「國學院大學本」(絹本)、「大禰宜家本」(紙本)、「成田山仏教図書館本」(紙本)。
  - ＝現在に残る、新たな本殿・拝殿が造営された元禄13年(1700)に書写・製作。

### 「権檢非違使家本」の奥書

- ・現存し、袖書を含め全体の古態を残すのが「権檢非違使家本」、永正13年(1516)の奥書あり。
  - 永徳年中に至りては、かくの如く御神事退転無きものものなり。
  - 右、件の目録に於ては、建仁二年帳を以て、至徳三季(年)に誌を改むるものなり。然れば、また虫喰損に依り、至徳三年の帳を以て、当時その旨に任せ録を改むるの処なり。尤も後代の証拠たるべきの故なり。よって件の如し。

永正十三年八月廿一日、之を写し畢んぬ。 案主  
田所  
録司代

大禰宜散位大中臣真之

(千葉県立美術館編、2015の写真図版から翻刻・読み下し)。

- ・絵巻の元の本は建仁2年(1202)帳で、それを至徳3年(1386)に改めたが、虫食い破損したので、至徳3年帳をもとに録を改めた。後世の証拠とするためである。永正13年(1516)に、之の写本を作成した。

### 「香取神宮神幸祭絵巻」の内容

- ・香取の海に面する津宮の3社「津宮(つのみや)」「膽男(まもりお)」「忍男(おしお)」に御船木を捧げる行列を描く。
- ・「権檢非違使家本」の内容(正神殿・神輿の構造)は、文永8年(1271)の「香取神宮造営注文」と整合。奥書の建仁2年(1202)には成立していたと推定(鈴木哲雄『香取文書と中世の東国』)。
  - 「神幸祭絵巻」が描く基本的な内容は、鎌倉時代初期の13世紀初頭には成立していたと考えられる。
- ・渡御行列の構成は、①「船木・大楯・翳(八龍神)・神馬などの捧げ物グループ」→②「神官群+八乙女・物忌+神楽・獅子の神輿先導グループ」→③「神輿の中核グループ」→④「供奉する上位神官グループ」になっている。※この内容・配列ともに、平安京の神輿渡御を踏襲する。

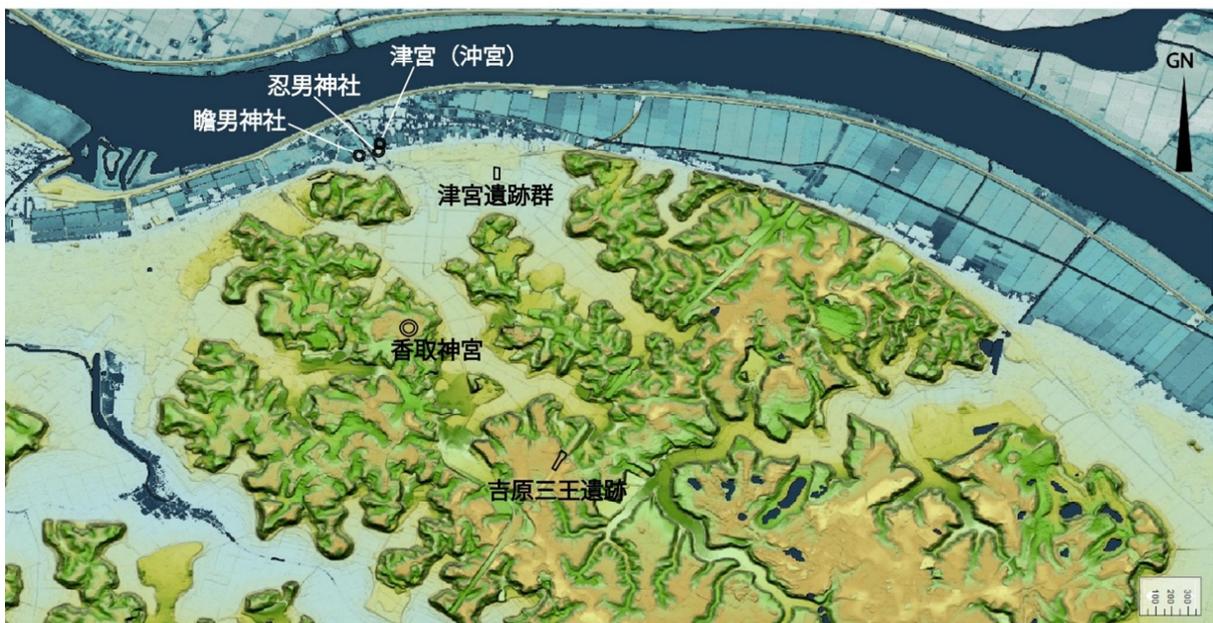
### 神幸祭の歴史的意義

- ・御船木を津宮の神社に奉納＝奈良時代(720年頃の成立)の『常陸国風土記』香島郡の津宮に船を奉る「御船祭」の系譜。水上交通と関連した祭祀。

- 本来ならば香取神宮の御神霊が神輿で渡御する必要はない。神輿渡御は新たに加わった要素。
- ・敢えて香取の神が津宮に渡御する。→香取の海の水運・漁撈の拠点である津宮と、香取神宮（香取社）との密接な関係を公に示す役割を持つ。
- ・水上交通や漁撈と関わる浦・海夫、関の管理支配は、本来、国衙行政「国務」に属する権限。

### 古代の津宮の性格と景観、なぜ津宮か？

- ・香取の津宮周辺の景観復元＝津宮遺跡群（香取中学校）の発掘調査成果。→古墳群から、10世紀を境に前方後円墳を削って中世へと続く集落の景観が成立。
  - 多量の網の錘(316点)、墨書土器「加万富」「門」「仲」「満」など72点、石帯（石製巡方）が出土。活発な漁撈活動と役所（官衙）・役人（官人）との関連性を示唆。それ以前とは大きく異なる景観。
  - 13世紀の津宮の景観・機能は、平安時代後期、11・12世紀の新たな国衙行政との関係のなかで形成された。
  - ・古代末期に発展した水上交通の要衝の掌握、海夫による水運と漁撈活動による水産物の確保が重要であったか。
- ※神幸祭の神輿渡御は、本来は国務（国衙行政）である浦・海夫の管理支配を、下総国の一宮である香取神宮が吸収し中世の香取社領に組み込むため、津宮と香取神宮との密接な関係性を公に示すうえで大きな意味を持った。
- ・室町時代、応永年間「海夫注文」で確認できる、大禰宜家による香取の海の水運・海夫の支配につながる。



第1図 香取神宮・津宮周辺地形図（中世初期の香取内海汀線推定図）単位：m

#### 古代末期～中世初期の香取海の水運復元と津宮三社の位置

「津宮」「膽男」「忍男」の三社は絵巻の絵画表現のとおり、汀線に隣接していたと考え、津宮遺跡群・津宮古墳群が立地する自然堤防の北縁が当時の汀線と推定できる（地理院タイル〈標高タイル〔基盤地図情報数値標高モデル〕〉に基づき高橋あかね氏作成の図面に笹生が加筆）。

## 至徳3年(1385)の変化

- ・「香取神宮神幸祭絵巻」には多数の神官を描く。→『年中行事絵巻』が描く、都市民の祭礼としての神輿渡御行列とは異なる。
- ・騎馬の神官の装束は役職により区別化される・
  - ＝布衣・浄衣に烏帽子（押領使・検非違使・酒司・田冷・八人検杖・内院八人・大神主）
  - 狩衣に烏帽子（国行事）
  - 衣冠+花笠（副祝・大祝・物申祝・権禰宜・大禰宜・神主）。

上位の大禰宜と神主（大宮司）には供人・随兵・引馬を加える。

※神幸祭の渡御行列は、香取神宮の神官組織の序列を明確に視覚化し、祭礼の観覧者に示す機能を持った。大禰宜には国行事が随伴。大禰宜は神幸行列で最上位に位置づけられている。

## 中世の神幸祭の性格と役割

- ・至徳3年12月1日、相伝職の大禰宜である大中臣長房が、遷替職の神主（大宮司）に正式に補任されて大禰宜が大宮司を兼帯するようになる〔至徳3年12月1日付「藤氏長者（二条良基）宣」(『千葉県史料 中世編 香取文書』旧大禰宜家文書150号文書)〕。
  - 大禰宜の大中臣長房を中心とした香取神宮の神官組織の再編。
  - 「権検非違使家本」奥書の「至徳三季（年）に誌を改む」は、これに対応した神輿渡御行列の再構成を反映。
- ・渡御行列で布衣・狩衣を着用する「国行事・検非違使・押領使」も国衙行政の役職。彼らを香取神宮の神官内に位置づけ、国衙行政（下総国の行政権限の一部）を、一宮である香取神宮の祭祀組織に取り込んだ状況を示す。
  - 神幸祭の神輿渡御行列は、定期的に神官相互で序列・関係を再認識し、その関係を視覚的に公に示す機能を持つ。

※香取神宮の神官組織は、中世香取社領の職領（役職に伴う領地）と不可分の関係にあり、中世の神幸祭は香取社領と神官組織を一体的に維持・継承するうえで重要な役割も果たした。

## 3.香取神宮境内古絵図と当社惣絵図の景観

### 香取神宮境内古絵図と当社惣絵図

- ・香取神宮(香取社)には古い境内図「香取神宮境内古絵図」が残る。→元禄13年(1700)以前の境内景観を伝える。
- ・境内古絵図→『香取大禰宜家日記』の元禄13年(1700)8月7日の記事から、この時に伝来した「当社惣絵図」と「祭礼の巻絵図」を修復し、その写しを作成。
- ・中央に正神殿を大きく表現、屋根は棟に4本の鰹木を置き両端に向かい合う鳳凰と鬼瓦を据える。
- ・下方(南側)に楼門を描き、香取社の中枢部を区画。
- ・斜め左下、垣(釘貫)の外側に神宮寺、上方(北側)の遠景に、香取の海の汀線に並ぶ津宮・瞻男神社・忍男神社を描く。→「神幸祭絵巻」とは対応関係にある。
- ・ただし、現存の写しの「境内古絵図」の正神殿の梁間3間×桁行3間、扉は中央に1か所、柱には龍頭が付けられず、「権検非違使家本」の「神幸祭絵巻」の正神殿とは異なる。写しが作成された段階で、省略された表現となったか。

## もう一つの境内絵図「当社惣絵図」

- ・御当社造工帳(当社惣絵図)は絹本、軸木の墨書から「実之」が「往古よりの帳」の写しを作成、慶長11年(1606)表保絵を行い、延宝3年(1675)に修復。
- ・「実之」は「権檢非違使家本 神幸祭絵巻」永正13年(1516)奥書の「大禰宜散位大中臣真之」と同一人物(鈴木哲雄『香取文書と中世の東国』)。
- ・全体的な構図・建物配置は「境内古絵図」とほぼ一致。
- ・中心の正神殿→梁間3間・桁行5間、正面の扉は2間で2箇所。屋根の棟には鬼瓦と東西2羽の鳳凰。柱の長押の下には明瞭に龍頭を丁寧に描く。  
→その構造と意匠は、文永8年の造営記録や「権檢非違使家本」の「神幸祭絵巻」の正神殿と一致。

※御当社造工帳(当社惣絵図)は、13世紀中頃までに成立した境内の状況を直接表現している可能性が高い。→「境内古絵図」の基本的な構図・建物配置も同様に考えられる。

→「当社惣絵図」と「境内古絵図」は、中世の香取社の境内景観を描写。

## 「当社惣絵図」と「境内古絵図」の正神殿の比較

- ・「当社惣絵図」の正神殿は梁間3間・桁行5間、正面の扉は2間で2箇所。屋根の棟には鬼瓦と東西2羽の鳳凰。柱の長押の下には明瞭に龍頭を描く。→文永8年の造営記録と一致。
- ・「当社惣絵図」の破損が著しかったので、桁行と扉の数が少なかったり、縁と板壁を錯誤したりして写しの「境内古絵図」が作成されている。

## 「当社惣絵図」と「神幸祭絵巻」の正神殿の比較

- ・「神幸祭絵巻」(権檢非違使家本)と同じ表現・構造の「彰考館本」の正神殿を比較すると、建物規模・構造、さらに縁の高欄の表現は一致する。  
→「当社惣絵図」と「神幸祭絵巻」は、同時期に同じ背景で写しが作成されていた可能性が考えられる。

## 玉垣・釘貫と御手洗

- ・「当社惣絵図」「境内古絵図」とともに楼門前に釘貫を描く。
- ・文永8年の造営注文では鳥居3基に続き、「玉垣三十一丈六尺」と「四面釘貫四百五間」を挙げる。→長さから玉垣は正神殿周辺、釘貫は境内の四面を区画したと考えられる。
- ・玉垣には「作料官米三十石、但し治承例二十五石」と注があり、玉垣・釘貫で境内を区画する境内景観は、治承元年(1177)の造営には作られていたと考えられる。→古代の玉垣を継承したか。
- ・「当社惣絵図」でも「境内古絵図」と同様、境内の東側の端に玉垣で区画され、内部に鳥居が建つ御手洗を描く。
- ・大永8年(1528)の「御手洗再興勸進帳写」→御手洗は、香取社の開基の昔に設定され、16世紀前半で既に埋没して累年に及んでいた。これを再興するため勸進(募金)を実施。

※鳳凰を頂く正神殿を中央に置き、周囲を玉垣・釘貫で区画して聖域とし、そこに入るのに必要な禊を行う「御手洗」を配置する景観は、13世紀前半には成立していた。

## 「御手洗再興勸進帳写」にみる御手洗の功德と役割

- ・「御手洗再興勸進帳写」では、香取社の御手洗は、開基の昔に「橘の於土の河原に准らえ」作られた。→伊弉諾尊が禊祓した「筑紫の日向の小戸の橘の櫛原」に対応し、御手洗を伝統的な禊の場として位置づけている。
- ・「香取神宮境内古絵図」の右(東)端に描かれた方形の水場が相当する。

- ・香取社に参詣する人々は、ここで沐浴すると、「苦を離れ清浄の樂を誇り、美麗却老の形と成り、「五臓三焦の万病は忽ち癒え、福寿長久の栄花」を頓に保つことができる。
- ・御手洗は、香取社への参詣者のためのもので、ここで禊・沐浴することで離苦・長寿などの功德を得られるとし、個人救済の信仰が明確に読み取れる。
- ・それは仏意と神慮によると続けており、神祇信仰と仏教信仰にもとづく。
- ・御手洗は年代を経るなかで埋没。このため、遠近から参宮する人々は禊をせずに「恣に花表社壇に近づき、汚穢不浄にて蔑ろに瑞垣玉庭に臨む」ため、穢れが神へ悪影響を与え「両脇両出の五衰、沙風鉄丸の三熱、神輿を煩わし奉」り、結果、「刀疾飢の三災、日を逐い起こり、水火風の七難、時に随い来る」状態となる、と論じる。  
→神が居られる神宮「花表社壇」に近づき、釘貫・玉垣で囲まれた、正神殿を中心とした聖域「瑞垣玉庭」に入るには、御手洗での禊が不可欠との認識。だから埋没した御手洗は再興しなければならないので、勧進を行う。

### 境内景観の信仰的背景

- ・大禰宜家文書の建永2年(1207)10月付けの「関白前左大臣(近衛家實)家政所下文」には新寺観音堂に関する内容が含まれる。  
→それは、中世香取社の大禰宜家で、12世紀初頭頃の「眞平」の十一面観音像造立が一族の隆昌につながったとの信仰が伝えられていたことを記している。  
→12世紀に香取社の神官層が仏教信仰を受容。中世の神官組織の再編と並行していたか。
- ・香取明神の本地仏の設定→江戸時代まで正神殿内には銅造の懸仏が存在。釈迦如来・十一面観音菩薩は弘安5年(1282)、地藏菩薩は延慶2年(1309)の年紀を彫る。
- ・弘安5年の釈迦如来・十一面観音には「香取太神宮御本地四体内」とある。→中世の香取社の境内景観が成立する13世紀には、香取神宮の神の本地を4体と認識。
- ・4体の本地とは、釈迦如来・薬師如来・地藏菩薩・十一面観音菩薩と考えられる。

※これは、13世紀初頭頃、解脱房貞慶が春日社第一宮を釈迦とした、春日大社の四宮の本地に相当する。

- ・春日社第二宮(香取神)は薬師如来。

### 社壇浄土説と香取社の境内景観

- ・13世紀初頭、解脱房貞慶の作とされる『神祇講式』の表白文には「諸社の瑞籬、則ち厳浄土なり。諸神の本地また大権薩埵なり。故に経に云わく、諸仏の居わす所、皆これ浄土なりと云々」とある(岡田莊司『神祇講式』の基礎的研究『大倉山論集』第47輯)。
- ・本地仏が設定されている神の社は浄土とし、「諸社の瑞籬、則ち厳浄土なり」の表現→「視覚的に瑞垣で区画された神社の空間を浄土」とする。
- ・香取社境内は、玉垣と釘貫で区画され、弘安5年までには春日社の四神に合わせて本地仏が設定されていた→正神殿を中心に玉垣・釘貫が廻り境界に御手洗を置く、香取社境内の「花表社壇・瑞垣玉庭」は、「社壇浄土」の認識が適応されていた可能性がある。
- ・中央の正神殿は、屋根の棟の東西に鳳凰、柱に龍頭を付ける。
- ・屋根の鳳凰は宇治平等院鳳凰堂と共通し、8世紀の西大寺薬師金堂に由来。→藤原氏の聖武天皇・光明皇后への信仰に根ざした西大寺に対する特別な意識「先考先妣への孝養」が作用(磯貝誠「平等院鳳凰堂棟上鳳凰像考」『日本宗教文化史研究』第27号第2号)。

※棟に鳳凰を据える香取社の正神殿は、薬師如来を本地とする神を祀る、仏教的に荘厳された「社

壇浄土」の中心建物と認識された。

### 境内景観の歴史的・信仰的な意味

- ・ 10 世紀以降、日本列島が北宋を中心とした交易流通圏に組み込まれる。
- ・ その過程で、日本の神祇も世界宗教の仏教に組み込まれ、仏教の天部と同様にビッグ・ゴッド化（個人を監視し、救済する神格への変容）。
- ・ 香取神宮と同様、古代に神郡が設置された九州の宗像神社の宗像三女神は、10 世紀には菩薩号（第一～三菩薩）を受け祭祀も仏教法会化。
- ・ 12 世紀には、沖ノ島・大島・本土の海浜に分散していた三女神を海浜の辺津宮に集めて祀る中世以降の宗像社の境内景観が成立。
- ・ 香取社も 12 世紀には仏教信仰を受け入れ境内景観が変化し始めたか。
- ・ 13 世紀には、藤原氏（近衛家）との関係から春日社の影響を受け、解脫房貞慶の春日社本地の設定と、『神祇講式』の「諸社の瑞籬、則ち嚴浄土なり」の信仰を取り入れ、「当社惣絵図」の境内景観が整えられた。

※この景観を、正神殿を中心に描いた、「当社惣絵図（御当社造工帳）」、それを写した「境内古絵図」は香取社境内を仏教的に意味づけた境内曼荼羅としての性格が考えられる。

### 4.まとめ—現代につながる流れ—

- ・ 16 世紀初頭、永正から大永年間の大禰宜実之(真之)の時代に「神幸祭絵巻」「当社惣絵図」の写しが作成され、同時に埋没していた御手洗の再興が勧進により計画された。
  - ・ 「御手洗再興勧進帳写」には「遐迹参宮の者」とあり、遠近の人々の参詣を示唆。
- ※大禰宜実之の時代、参詣者を意識して祭礼と境内の復興整備が検討されていた。中世から近世へ移行する状況を示すのではないか。
- ・ 社殿は、元禄 13 年（1700）の徳川綱吉により本格的に復興。古代に復して千木・鯉木を戴く本殿が成立。
  - ・ 天保 4 年（1833）の小林重規の『香取志』は、16 世紀当時の御手洗の埋没と再興について、飯篠長威斎による香取神道流の創設の伝説につなげ、香取神道流の創設と結びつけ説話化。
- ※16 世紀初頭の大禰宜実之の時代に確認できた境内と祭礼の復興の動きは、江戸時代には本格化。新たな説話を加え、東国三社の一社として江戸の多くの人々が訪れる東国の代表的な参詣地へ。

### 主な参考文献

- ・ 磯貝 誠「平等院鳳凰堂棟上鳳凰像考」『日本宗教文化史研究』第 27 号第 2 号（通巻第 54 号）、日本宗教文化史学会、2023。
- ・ 岡田莊司「『神祇講式』の基礎的研究」『大倉山論集』第 47 輯、大倉山精神文化研究所、2001。
- ・ 香取神宮社務所編纂『香取群書集成 巻 1』香取神宮社務所、1943。
- ・ 香取神宮史誌編纂委員会校訂『史料纂集 古記録編 101 香取大禰宜家日記第一』続群書類従完成会、1995。
- ・ 木村 修「千葉県所在および房総関係の懸仏」『千葉県立中央博物館研究報告』7（1）千葉県立中央博物館、2001。

- ・行徳真一郎「宮曼荼羅の成立」『哲学年報』52、九州大学文学部、1993。
- ・黒沢哲郎編『津宮遺跡群』財団法人香取郡市文化財センター・佐原市、2004。
- ・近本謙介「『春日権現験記絵』成立と解脱房貞慶」『中世文学』43巻、中世文学会、1998。
- ・笹生 衛〔香取神宮の歴史と祭り—古代・中世の信仰と「神幸祭絵巻」を中心に—〕千葉県立美術館編『香取神宮 神に奉げた美』千葉県立博物館、2015。
- ・笹生 衛「第4章 神輿と祭礼の誕生」『まつりと神々の古代』吉川弘文館、2023。
- ・笹生 衛〔「香取神宮神幸祭絵巻」と神幸祭の史的背景〕研究代表者、鈴木哲雄『香取文書調査報告書 香取文書の文化財としての保存に向けた基礎的研究』研究成果報告書、2024。
- ・佐藤真人「貞慶『神祇講式』と中世神道」『東洋の思想と宗教』第18号、早稲田大学東洋哲学研究室、2001。
- ・鈴木哲雄『中世関東の内海世界』岩田書院、2005。
- ・鈴木哲雄『香取神宮と中世の東国』同成社、2009。
- ・千葉県史編纂審議会編『千葉県史料 中世編 香取文書』千葉県、1957。
- ・千葉県立美術館編『香取神宮 神に奉げた美』千葉県立博物館、2015。
- ・ノレンザヤン、アラ (ARANORENZAYAN) (藤井修平・松島公望・荒川歩監訳)『ビッグ・ゴッド 変容する宗教と協力・対立の心理学 (BIG GOD *How Religion Transformed Cooperation and Conflict*)』誠信書房、2022。